

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名（姓、名）	タサキ ミドリ 田崎 みどり	授与番号 甲 1565 号
学 位 の 種 類	博士(人間科学)	授与年月日 2022 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 1 8 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]	
博士論文の題名	臨床ナラティブアプローチからとらえた認知症高齢者との会話の実践とその可能性	
審 査 委 員	(主査) 森岡正芳 (立命館大学総合心理学部教授)	増田梨花 (立命館大学大学院人間科学研究科教授)
	安田裕子 (立命館大学総合心理学部教授)	
論文内容の要旨	<p>本研究は、認知症高齢者との会話実践を主題とし、臨床ナラティブアプローチの観点から認知症高齢者との会話をとらえなおし、会話における認知症高齢者の主体としての<わたし>の回復の臨床的意味を示すことを目的とするものである。本研究は「痴呆老人からみた世界はどのようなものなのだろうか」という、小澤（1998）らの先行研究の問いをもとに、認知症高齢者が「主語として自らを表現し、自らの人生を選択する主体として現れることがあまりに少なかった」という問題意識から出発している。本論文は 4 部から構成されている。</p> <p>第 1 部第 1 章では、本研究の検討課題を示し、認知症高齢者の主体の回復に、臨床ナラティブアプローチがどのように益するかについて、本研究の位置づけを明らかにした。その上で、認知症高齢者との会話を多層的にとらえなおし、認知症高齢者との会話の実践とその可能性について、当事者の生活世界に沿った形で、新たな仮説を生成するという本研究の目的を提示した。</p> <p>第 2 部第 2 章では、認知症高齢者への代表的な精神病理学や心理支援の観点を批判的に検討し、ナラティブの視点の独自性を示した。とくに発話の宛先が不確かな「偽会話様発話」からなる認知症高齢者同士の偽会話、また偽会話によって構成される「なじみの関係」（室伏,1999）に注目した。「なじみの関係」とは、記憶障害や現実見当識障害を有する認知症高齢者が示す、誤認であっても親近感や同類感に支えられた関係性である。この関係性の質を捉えるにあたって、ナラティブの一次過程の概念を用い、会話のどこに焦点を当て、どのように記述するかという検討を行った。その上で、認知症高齢者との会話の可能性を広げるために社会詩学(social poetics)の観点を導入した。これは研究者と参加者が、自分たちの実践についての意味を形作り、理解する場において、応答的な対話と関係が成り立つ瞬間に焦点を当てる方法である(Katz & Shotter,1996)。第 3 章では、第 3 部の各章に共通するデータの収集方法と分析方法を示した。データの分析方法として、「仮説継承型事例研究」の枠組み(斎藤,2013)を範に取り、ナラティブアプローチにおける事例研究の概要を示し、本研究を質的改善研究と位置づけた。</p> <p>第 3 部第 4 章では、80 歳代女性中等度の認知症の A さんとの会話の実践場面全 22 回の発話内容から、認知症高齢者からみた「なじみの関係」が構成される会話実践のプロセスについて検討を行った。その結果、「認知症高齢者のなじみの有無と関係性の種別モデル」が生成された。それによって認知症高齢者は、私たちが通常想定している流れとは異なった関係性の深化プロセスを有している可能性を示した。</p> <p>第 5 章では、認知症を有する A さん及び、B さん（80 歳代女性）との会話の実践において得られた会話における発話連鎖を辿り、会話分析を参考にした発話連鎖の分析を行った。その結果、関係性を維持するためには、認知症高齢者の発話をナラティブの一次過程を含むものとしてとらえ、彼らの言葉と枠組みを用いつつ「適度な差異」を生じさせる文脈を構成していくことの実践的意味が示された。</p> <p>第 6 章では、認知症を有する A さんとの会話において、主体としての<わたし>が生成されるプロセスを辿り、「偽会話様発話」について、会話の宛先とその機能を検討した。その結果、A さんの<わたし>は、「わからなさ」の提示を差異と受けとることによって生じ、「偽会話様発話」は、他者にも自己にも</p>	

	<p>向けられ、内言と等しい機能を有しているという仮説が見出された。以上の考察によって、「偽会話様話」であっても、その発話に発話を連鎖させていくことで、認知症高齢者により豊かな会話を構成できる可能性があることが示された。</p> <p>第4部第7章総合考察では、4つの観点から本研究のまとめを行った。1) 認知症高齢者本人の視点に基づく「認知症高齢者のなじみの有無と関係性の種別モデル」の意義とその可能性について、2) 認知症高齢者の〈わたし〉が生成されるプロセスと、他者との関わりから主体としての自己が生じる幼児期の発達プロセスとの類比について、3) 「無知」(Not-knowing) という基本姿勢すなわち、実践者自身の率直な関与の持つ関係促進的な意味について、4) 応答的な対話と関係が成立する瞬間に焦点を当てる社会詩学の方法論とその可能性について、以上の4点から考察を行った。</p>
論文審査の結果の要旨	<p>本論文は、認知症高齢者との会話実践を主題とし、臨床ナラティブアプローチの観点から認知症高齢者との会話をとらえなおし、会話における認知症高齢者の主体としての〈わたし〉の回復の臨床的意味を示すことを目的とするものである。認知症高齢者数の増大の中で、認知症に関わる診断と治療・療育は目覚ましく展開している。心理職は、認知症の諸検査を担当するだけでなく、デイケアや介護の様々な場面において認知症高齢者と接する機会が多くなっている。申請者は、大学院での実習生以来継続して、精神科デイケア場面を中心に認知症高齢者との支援の現場で、会話をベースとしたコンタクトの形成に関心を持ってきた。本研究は、そこで形成された問題意識を出発点としている。会話のように見えながら、意味内容的には話が食い違っていて会話になっていない「偽会話」とされた認知症高齢者の言語行為の特徴に対して申請者は、会話としては成立していないが、その反復の中で一人の認知症高齢者が、ある瞬間にその人の〈わたし〉が現れ、語りかけてくるという関係が生じることに気づく。</p> <p>その関係性の質を会話の精緻な分析を通じてとらえた点において、本研究の新奇性、独創性は高い。以下の3点において本研究の評価をまとめることができる。1)臨床ナラティブアプローチにおけるナラティブの一次過程に焦点を当て、認知症高齢者との間に生じる「なじみの関係」の成立過程を分析したこと。2)そのためには実践研究者の会話に参与する姿勢が重要で、社会詩学の方法を導入し、無知の姿勢、すなわち実践者が既存の知識をいったん宙づりにし、無知のポジションに自らを置くことの実践的意味を確認したこと。3)以上の関係性の質と研究者の姿勢に関わる特徴について、実践において得られた会話における発話連鎖を辿る独自の分析を行い、「仮説継承型事例研究」の枠組みを提示できたこと。</p> <p>一方、第3部において、主体としての〈わたし〉が再構成されるプロセスが、会話の微視的な分析によって示されたが、デイケア場面のどのような文脈において成り立ったのかの観点をさらに踏まえる必要があり、導入された理論と本研究で記述された実践には隔たりがみられる点に課題を残している。第3者の観点と照合することの工夫と理論的裏付けがさらに求められる。このような課題を残してはいるが、本研究が、認知症高齢者との会話を主体回復のためのリハビリテーションとして示しえたことは、臨床ナラティブアプローチの新たな領域を開発する点、その実践性において評価できる。</p> <p>本論文の最終試験を兼ねる公聴会は2022年1月13日(木)18時～20時、C棟473セミナールーム(立命館大学大阪いばらきキャンパス)で行われた。審査者からは以下の点について質疑があった。1) 会話において含まれる間合いの中で生じている体験の多義性についてどのような解釈が成り立つか。2) 事例研究を複数の時期に分けて記述したが、各時期における当事者の〈わたし〉はどのように再構成されたか。以上について、申請者は語る行為において出来事を選択配列する手前の、前反省的な次元で生じているプロセスに焦点を当てること。自己目的的な会話(会話を通して何かを目指すのではなく、会話を続けることを目的とした会話)を実践するという姿勢によって、プロセスに付き添いつつ、新たな会話を共に模索することが認知症当事者のケアとなること。このような観点を提示し、明確に応答した。</p> <p>本研究は、認知症高齢者の現場において見過ごされがちな会話の実践のもつ臨床的有意性と、その特徴を明確に示し、検討した点において十分評価できる。以上により、審査委員会は一致して、本論文は本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しいものと判断した。</p>
試験または学力確認の結果の要旨	<p>本論文の公聴会は2022年1月13日(木)18時～20時、C棟473セミナールーム(立命館大学大阪いばらきキャンパス)で行われ、質疑応答を中心にした論文審査を行った。審査委員会は最終試験として論文審査を中心に、本学大学院人間科学研究科博士課程後期課程の在学期間中における学位申請者の学会発表など様々な研究活動、また公聴会の質疑応答を通して、博士学位にふさわしい能力を有することを確認した。外国語文献の読解においても、学位申請者は十分な能力を備えていることを認めた。なお本論文に関わり、学位申請者は以下の査読付き論文を含む2編を『ブリーフサイコセラピー研究』誌に掲載しており、博士論文提出要件を満たしている。</p> <p>田崎みどり(2013).会話をリハビリに役立てるための工夫:認知症高齢者との治療的会話の試みから。ブリーフサイコセラピー研究 22(1),14-24.</p> <p>以上より本学学位規程第18条第1項に基づいて、学位申請者に、博士(人間科学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>

